

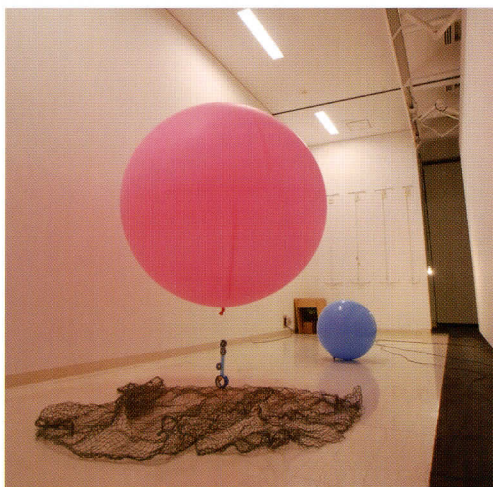
誌上 ギャラリートーク

Gallery Talk

01

高松コンテンポラリー アート・アニュアル vol.00

会期 2009年11月20日(金) ▶ 12月20日(日)



梅田哲也《分け方》2009年

「年に一度の現代美術展の始まり始まり…」と言ったところでしょうか。高松コンテンポラリー…この余りに長いカタカナ名だけで一歩引いてしまいそうですが、その一歩を前へ踏み出し、秘密の部屋の扉をくぐると、そこは入り口から出口まで「!!!」が続くアートの世界です。

まず、off-Nibroll (オフ・ニブロール)、CGを駆使した、めくるめく映像の世界。音と絡みながらエンドレスで変わり続ける「ヒト」と「モノ」の形。次に巨大なスズメバチが待ち構える奇妙な額の門をくぐると、作家の肖像と髪の毛を混ぜた顔料で描かれた髪の毛の絵、その傍には作家本人がパフォーマンスで切り取った黒髪の毛。「果たして体から離れた髪の毛は私なのか私では無いのか?…」素朴な疑問から始まり、自己と他者の関係を問いつけるしばたゆりさんの世界。

第2室に足を踏み入ると「あれっ? 展覧会なのに工事中?…」と見紛うばかりの梅田哲也さんのサウンドインсталレーション。水の音、微かに飛び散る火花、扇風機やガラスを這う小さな昆虫のような装置の動き、突如上下するポリタンクなど、色んなものが関係しあって起こる様々な現象を楽しむ音のマジック。目を閉じて耳を澄ませると、美術館という生き物が呼吸をし、血液を循環させる心臓の鼓動音のように聞こえてきます。その隣では、夕焼けを見て泣きたくなった幼い頃の記憶を呼び戻すような赤松きよさんの不思議な生き物たち…。最後のスペースは志賀理江子さんの円陣を組んだ写真、無遠慮に人の目を奪い、時に優しく、時には暴力的なアプローチで人の心を揺さぶる構築された景色の輪。輪の中心には万力がぶら下がり、揺れながら祈りを捧げています。

テーマは「時をつなぐビジョン」…時と人とアートがつながり作用し合う現代美術の誕生を祝います。
[池田幸子]

02

コレクション ^{プラス} メタモルフォーゼ!!!! 変身アート

会期 2010年2月20日(土) ▶ 3月28日(日)



浅田政志《浅田家》

高松市美術館コレクションに何らかの要素をプラスして、ユニークな展示空間を創出する「コレクション+(プラス)」。前回のテーマ「音」に続き、今回のテーマは「変身」です。今回「変身」をめぐる当館コレクションと競演するゲストアーティストは5人。簡単にご紹介しましょう。

浅田政志は、自身の家族とともに消防署員、選挙活動、ラーメン屋、泥棒などあらゆる職業の人々に変身し、《浅田家》シリーズとしてその姿を写真に収めます。コミカルでありながらも、家族の絆の結晶とでも言うべき「浅田家七変化(どころか百変化?)」を眺めていると、誰しも暖かな気分になれるはず。のびアニキは、ドラえものの「のび太」への変身に特化したアーティスト。街角で悪戯っぽいパフォーマンスをして、それを映像作品として発表します。今年11月からはタイで開催される日本の現代アートを紹介する展覧会「Twist and Shout」に草間弥生ら大御所とともに参加し、本展ではタイで制作した映像作品も発表予定。糸崎公朗は、自身の芸術上のテーマ「非人称芸術」の師としてリスペクトするマルセル・デュシャン(当館コレクション)とのコラボレーションを展開。昔の高松の写真を立体的に組合せ、私たちにタイムスリップを体験させてくれる《復元フォトモ》も登場します。大島よしふみは、昆虫と乗り物を組み合わせ、体全体で楽しめる彫刻作品を制作。今回は美術館エントランスにこの愉快的な昆虫が登ります。あきやましんごは、美術館入口のガラス扉にペインティングを施し、「変身ワールド」への入口を楽しく演出します。

美術館で「変身アート」を楽しんだあとは、美術館近く丸亀町商店街にて開催される「ストリート展!? メタモルフォーゼ!!!! 変身アート」(会期は当館と同じ。詳しくはHP <http://www.art-oldnew.jp>)にて、もうひとつの「変身アート」展をお楽しみください。

[高松市美術館学芸員 牧野裕二]



Activities

時	記事	活動内容
4/12	A	子どものアトリエ vol.21 「お花見アート2ピンホール・カメラ大撮影会！」(講師:写真家・高橋章氏) アシスタント
4/17~5/31	B	「加山又造展」ギャラリートーク(開催回数のべ22回、参加者数のべ1,424名)
4/19		高松市歴史資料館サポーター、シヴィの加山展トークを聞いた後、懇談会。
5/15~6/30		シヴィ新規メンバー募集(書類審査および面接を経て7/25より8回研修)
5/24		子どものアトリエ vol.22 「鳥獣戯画を描こう」(講師:日本画家・北地孝氏)
5/30	C	アートで遊ぼう! 「もみ紙に挑戦！」(講師:当館学芸員・川西弘一他) アシスタント
7/24~9/6	D	「大岩オスカル展」ギャラリートーク(開催回数のべ14回、参加者数のべ259名)
8/1	E	美術館の日イベントアシスタント
8/8・9		子どものアトリエ vol.23 「ピンホール・カメラで見る世界の夢」(講師:写真家・岡崎絵美氏) アシスタント
10/3	F	犬島・直島研修旅行
10/10	G	子どものアトリエ vol.25 「音のオブジェをつくる—ひとつの中のふたつ、ふたつの中のひとつ」(講師:美術家・金沢健一氏) アシスタント
10/18	H	パパとキッズのアートプログラム part2 世界でたったひとつのかたち with ノッポさん(講師:ノッポさん他) アシスタント

※ギャラリートークは会期中の日曜・祝日、各午前・午後で開催

civi の主な活動

2009.
4月
↓
2009.
10月

A 子どものアトリエ vol.21
「お花見アート2
ピンホール・カメラ大撮影
会！」アシスタントをして

塩江美術館での「お花見アート」も今回で2度目、2年目になりました(昨年開催の前回の模様はしびのーと18号でどうぞ)。桜は残念ながらかなり散っていました。今回は、それでも気持ちの良い春。今回はピンホールカメラで塩江を写そうという企画です。ピンホールカメラも自分で作ります。ピンホールカメラは箱の形や、光の箱に入る時間の長さによっていろいろな写真が撮れます。写真家の高橋章先生の指導で、それぞれ持ってきた空箱でマイカメラを製作。塩江の風景を撮影した後は、現像も自分でします。なんと美術館のトイレが暗室になっていました。前日にトイレを封鎖して準備したそうです。印刷紙セット↓撮影↓現像の手順を覚えた子どもたちは何度やっても楽しそうでした。お弁当持参で、本当にお花見気分でした。一日でした。【三好ひさこ】

B 「加山又造展」
ギャラリートークを
終えて

当初「本当に加山又造展がこの高松市美術館で？」との声があるほど、加山又造展の開催は、私たちシヴィにとっても驚きでした。本展は、加山又造没後5年を機に開催された没後初めての回顧展。しかも、東京の国立新美術館と高松市美術館の2会場のみの開催とあって、来場者数、約2万4千人とその反響ぶりは大変なものでした。
また、ギャラリートークでは今まで経験した事のないお客様の多さにも驚きましたが、それ以上に

お客様の真剣さ、興味の深さに緊張しました。通常は常設展に使用されている部屋も使い、会期を前期と後期に分けて作品を一部入れ替えて展示するという大きなスケールの特別展となり、私自身これまでになく緊張とギャラリートークの楽しさ、日本の美しさを実感した展覧会となりました。

この展覧会では、大きな作品が多数展示されましたが、その中でもひととき大きく見事だったのが、金地に黒と白の牡丹を描いた「牡丹」という金屏風です。加山は黒い牡丹を墨牡丹と表現し、非常に魅力を感じていたそうです。実物の黒牡丹は光の具合で見た感じが変わりますが、加山の墨牡丹と比べてみるのも面白いかもしれません。【石床亜希】

C アートで遊ぼう！
「もみ紙に挑戦！」
アシスタントをして

油絵に比べると、あっさりとした平坦な画面、だと思いがちな日本画ですが、加山又造の描く日本画からは、油絵に負けない重厚さを感じます。加山が用いる手法の一つが「もみ紙」だということに挑戦してみました。まず、和紙をしくちやに丸めて揉んで、細かい折り傷をつけます。それを濃いうめに溶いたアクリル絵具に浸すと、しわのおり目に色が入りしわで凹凸になった和紙に不規則な網目模様が見えます。これかもみ紙達人の用いる手法はまるでマジックのようで、たちまち立体的で神秘的な画面が生まれました。もみ紙を台紙に貼り、絵を描いたり、金紙をはったりして、作品を作り、消しゴムを彫って作った落款を押すと、又造先生も驚く？見事な、もみ紙の日本画が完成したというわけです。皆さん上出来でしたよ。【石原ニエ子】

D 「大岩オスカル展」
ギャラリートークを
終えて

初めて出会ったオスカル作品は、「ガーデニング(マンハッタン)」でした。ひとめ見て最初の印象は「きれい……、そう……」が付くのです。まるで、水に浮いている花のような、ニューヨークの摩天楼が水の中に沈んでしまったような、あるいは、空の上から眼下に広がる巨大都市を見下ろしているような……綺麗なけれど綺麗で終わらない何か、その怪しい魅力からとれない、説明のできない美しさ、それを、作者のオスカルさんご自身がギャラリートークで丁寧に紐解いて下さり、スーッと疑問が解かれ私の一番のお気に入り作品となりました。他の作品も同じように、ご本人が謎解きを伝授して下さい、まるで絵本を読み解くように、何時間でも作品の隅々まで楽しむことが出来る、格別の展覧会でした。トークでは、オスカルさんがして下さったように、出来るだけ作家本人の言葉を忠実に伝えるよう心がけました。【池田幸子】

E 美術館の日イベント
アシスタントをして

8月1日土曜日、第1回「美術館の日」イベントが開催されました。高松市美術館が1988年8月6日に開館したことから毎年8月の第1土曜日を市民の皆さんに美術館に親しんでいただく「美術館の日」と制定したもので、当日は展覧会がすべて無料開放され、多くの方々にご来館いただきました。体験型イベント「ふらっとアート」では、文字通りふらっと美術館にやって来た方が気軽にアートに親しんでいただけるよう工作体



験コーナーを設け、皆さん試行錯誤しつつも楽しそうに制作されていました。また少々ミニアツクなクイズ（これが解ければ市美術館通）、心癒されるミニコンサートなど、子供から大人まで楽しめるイベントで美術館は大賑わい！美術館の楽しさ・面白さを味わっていただけたことでしょうか。これから「Welcome to the museum」来年のイベントもお楽しみに！

【木村真由美】

F 犬島・直島研修 「犬島は実におもしろかったわ〜！」

10月3日シヴィイの研修旅行がありました。前半は直島での自由鑑賞で、メンバーはそれぞれお目当ての展覧会場に足を運びます。私は大竹伸朗プロデュース「直島銭湯♥湯」の一番風呂に入りました。外観も内装も、まさにシンロー・ワールド！お風呂でほっこりしながらも賑やかなオプジェの数々、多彩な仕掛けを楽しませていただきました。後半は全員で岡山県の「犬島アートプロジェクト精錬所」を体験してきました。犬島では百年前に稼動していた銅の精錬所跡地を芸術作品として再生し、一般公開しています。

そこは完全マニュアル化された見学コースの世界で、ガイドの淀みないトークに促され一行は進みます。そんなシステムに新鮮さを感じる者、ガイドのトークを検証し自らと比較する者、シヴィイにとって様々な糧となる半日となりました。筆者個人の意見としては、かつて賑わっていた頃の精錬所の復元模型やパース等も見てみたい気がします。建築家・三分一（さんぶいち）博志、アーティスト・柳幸典、両名のコラボで現代アートとして蘇った今、それも「蛇足

というところでしょうか？ともかく360度映画のセットのような風景の中で充分アートを満喫したオトナの遠足でした。【大澤宏敏】

G 子どものアトリエNo.25 「音のオブジェをつくるーひとつの中のふたつ、ふたつの間のひとつ」アシスタントをして

昨年の「コレクションショップ」ひびきあう音色彩」にも出品されていた、金沢健一さんのワークショップ。今回は、長さ30cmほどの鉄の角材を、金沢さんの補助で、参加した方一人ひとりが自らバーナーを手に、2つに分割。紐を通すと、2つの鉄の棒が重なる音を楽しむ、音のオブジェの完成です。同じ太さの鉄の棒ですから、短い棒からは高い音が、長い棒からは低い音が生まれます。その事を、金沢さんは「音は目に見える」といわれており、ワークショップの後半は「音を見る・形を聞く」レッスンのひと時となりました。オブジェのひとつずつ長さの順に並べ、参加した皆さんが手に持ち、音を鳴らす。高い音が低い音へ。低い音から高い音へ。同じテンポで金属の澄んだ音が響きます。金沢さんの作品、音のかけらのコラボレーションやゲームの時間もあり、音の溢れる暮らしのなかで、静かにひとつの音を傾け、それを感じる、貴重な時間となりました。【前田裕美】

H パパとキッズのアート プログラムPart2 世界でたったひとつのかたちミナノッポさんアシスタントをして

かつてのNHK教育テレビ「できるかな」でおなじみのノッポさ

んを迎えてのワークショップは、盛りだくさんな内容！メインは、等身大の分身を作って好きなポーズをとるプログラム。大きな紙にお互いの姿を写し取る作業では、かっこいい服をお父さんに着せようというハートや星のついたカラフルな服を「生懸命描く子ども達の姿が見られ、お父さんからは「細く描いてよ」というリクエストの声も聞こえていました。次々と出来上がった作品が並ぶと、お父さんが子どもを抱きかかえたり、肩ぐらましたり、それぞれに世界でたったひとつの親子のカタチがずらり。協力して作品を作り上げて、親子の絆はますます深まったように、「今日は遊んでくれてありがとう。」「どういたしまして。また遊ぼうな。」と言いつつ胸がじんわりと熱くなりました。子ども達にとってもお父さん達にとっても特別な思い出になったのではないのでしょうか。【遠山直子】

C i v i i が 見 た !

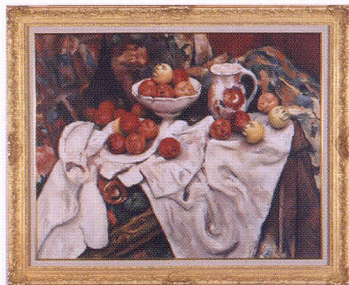
高松市美術館コレクション

リンゴかと思ったら、えっ！人の顔だ。あっちも、こっちも…みな同じ顔。

作品のタイトルは「批評とその愛人」—なんと変わった題ですね。でも見たことのある絵だと思いませんか？そうです、この絵はセザンヌの代表作「りんごとオレンジ」（オルセー美術館蔵）を基にしたものなのです。構図や対象の捉え方などの点で、きわめて高い完成度を示すといわれる、静物画の名作です。この傑作を、こんな風に変身させたのは、ご存知、森村泰昌です。以前、このしびのーと5号でもご紹介した、「肖像（ヴァン・ゴッホ）」の作者です。

森村は、自ら「自分はなんにでもなれる」と豪語し、ある時は映画女優に、又ある時は名画の中の人物になります。果ては、この絵の様な静物にまで変身してみせるユニークな作品を発表し続けています。森村は、「ぼくにとってセルフポートレートとは、自分の持つ多様な可能性を探り当てることでもある」と述べています。

ところで、このセザンヌの絵を森村は「薬膳料理」に例えています。薬草や漢方薬などが入った、渋味や苦味がある料理のことです。「今まで、セザンヌの絵が



森村泰昌《批評とその愛人》1989年
89.8×108.5cm 高松市美術館蔵



(参考)ポール・セザンヌ《りんごとオレンジ》1895-1900年
73×92cm オルセー美術館蔵

よくわからなかった。この絵には食欲をそそる感じがしない。でもまずくて食べられないか、というところでもない。そこで、食べ物に例えたら何だろうと考えていると、ちょっと分かった気がした。物に例えたらと考えてわかった気がした。」(ちくま学芸文庫『超・美術鑑賞術/お金をめぐる芸術の話』より)

セザンヌの絵の中にある渋味や苦味が味わえるのが大人になったということなのでしょう。皆さんは、この森村のりんご、食べたいと思いますか？一体どんな味がするのでしょうか。【植松紀子】

大岩オスカル：夢みる世界

ギャラリートークから



2009年7月25日、「大岩オスカル 夢みる世界」展オープニングに参加した大岩オスカルさんに、展示室でギャラリートークをしていただきました。知的でスマートな風貌のオスカルさんは、独特の温かみとユーモアのある日本語で（オスカルさんの母国語はポルトガル語）、1時間にわたり、自身の生き立ちや作品についてお話をいただきました。ここではその模様を一部割愛してご紹介します。

【高松市美術館学芸員 牧野裕二 書起し：高松市美術館 藤本圭子】

◀大岩オスカルさん

●サンパウロで過ごした少年時代

自分は、あんまり子どものときから文章書くのも下手だったし、人と話すのも下手だったけど、中学校のときくらいから学校の新聞に絵を描いたりイラスト描いたりして、子ども用のコンペに絵を出したりして、賞もらってます。それから、もらったお小遣いでまた絵の具を買ったりして絵を描いていた。（今回の展示には）あんまり子ども時代の作品は無いけど、1点だけ中学校のときの作品がある。あのポトルの中に小さな船が入っている作品。子どものときは絵を勉強するというよりは、いろんなものを作ったりマンガを描いたり、子どものときは手をよく動かしていた。

●東京へ

大学出て、ちょっと向こうでも働いて、1991年25歳くらいのときに日本に来て、まだ全然人も知らない友達もいなかったけど、とりあえず学校は建築を出ていて、91年ってバブルで日本経済がよかったので、すぐ建築の仕事を見つけて、設計ね、どうやって家つくるか、ショッピングセンターつくるかの仕事をやっていて、夜とか8時くらいに家帰ってきて、当然疲れてたけど自分でも何かやろうと思って、絵を描き続けた。

●《ゼロセン・パイロット》について

ちょっとこれは秘密が入ってるのね。よく匂いを嗅ぐとコーヒーの匂いしてるのね。どうしてコーヒーかという、色っていうのは洋画でもそうだけど、画材屋さんに行ってインクを買ってくるけど、昔の人は自分で色を作ってた、インクを作ってたね。…このバックの茶色い部分とか、茶色はインスタントコーヒーのシロップを薄めて水と混ぜて、色を出していった。…一人私の友達でオザワさん（注：小沢剛のこと）という人がいて、この人はコーヒー使わない、醤油を使っている。

●ニューヨークへ

2002年まで日本にいて、そこから、日本の生活もいいけど、…まあ、何かまた違うことしようかなと思って。また生活変えるのは大変だけど、もうちょっとね、元気があるうちに何かしようと思って、今度はアメリカに行くことにした。…ニューヨークの7年前というのは、アメリカもいろんなヨーロッパとか中東に石油関係でいろいろ手を出

してビジネスやったりして、何かが良く行かなくて、アメリカも敵が多くて。で、2002年にアメリカのすごい大きいビルが、アメリカを嫌いな人から飛行機ハイジャックされて、大きいタワーが二つも崩れちゃったよね。それがニューヨークだったので、僕が行く直前で、「行こうかな、どうしようかな。」と思いながら半年ずらして結局ニューヨークに行ったのね。で、ビルがやられたからアメリカがイラクとかアフガニスタンと戦争し始める。戦争している国で、すごい社会に緊張感があるかなと思ったら、歩いていたら意外と平和な街というか、すごいみんなおしゃべりして美術館に行ったり、パーに行ったりして、全然戦争してる国には見えないような姿だったというか。でも、例えば、1ヶ月後に大停電というのがあったのね、向こうに行ってるから。そしたら何かこう爆弾が落ちて停電になったのかなと、ものすごい緊張感が走るのね。で、ただの停電とわかって、みんな家に戻って、ビールが温まる前にビール飲んだり、アイスクリームが溶ける前にアイス食べたりして、一日遊んでたという。でも、やっぱり平和でありながら緊張してる街だと思って、この絵《ガーデニング（マンハッタン）》を描いたのね。これは野原に花が咲いているように見えるけど、街が空爆されてるとも言えるような二面性を持った絵。これが行ってすぐ描いた絵の中の1枚です。



▲《ガーデニング（マンハッタン）》の前で

●頭の中の風景

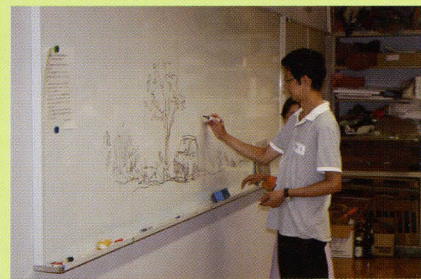
普通は絵っていうのは、何かがあってそれを描くというのがあるけど、僕の場合テーマというか気になるものを決めて、そこから何も無いところへ描く作品が多いという。どこかというよりは、頭の中の風景。

●《総理大臣の悪夢》について

さあこれは何でしょうか。よく見ると日本の地図が隠れているのね。…で、このおうちには誰の家かわかるかな？最近3年前で来た、日本の総理大臣が住んでる総理官邸。そこでは総理大臣が半分住んでる、半分仕事してるようなところ。それをいろいろ調べてビルを再現して、もちろんビルの中の図面とかは秘密で手に入らないけど、昔建築やってたから何となく想像できて。これが日本の総理大臣の寝てる部屋ということも布団が敷いてある。…で、夜になると悪い夢を見て、巨大な出来事が起きてるけど、何が起きているかというのはよくわからないんだよね。巨大なタコに食べられそうかわからない。って言うてるって怖い夢でありながらもおもしろいという。

●子どもたちへのメッセージ

（注：トークを聴きに来た中学の美術部員たちにむけて）僕が中学校、10歳か12歳のときに漫画家の手塚治虫という人がブラジルに来たのね。…そのときに子ども向けのワークショップみたいなのがあって、自分の絵もその先生に見せたことがあるのね。そのときに言われたのが、当時はアメリカのマンガをよく読んで、…言われたのが、マンガ好きになったらあんまりマンガを描かずに、マンガ好きなんだっらいいマンガを描くためにいい映画とか本とか音楽聴きなさいって言われたのね。絵が好きなのは、絵ばかり描くというか見るのではなくて、他のものもいいものを見たら自然にいい絵が描けるのではないかなというのが僕のアドバイスかな。あと、あんまりこういう風に先生がしなさいと言うのを気にしないで。自由に描いてくれたらいいから。



▲ワークショップにて「お手本」を披露

ご案内

私たちと鑑賞をご一緒しませんか？

美術館ボランティア「civi（シヴィ）」による
ギャラリートークは特別展会期中の毎日曜日
および祝日の午前11時～、午後2時～の
1日2回、2階展示室にて行います。

発行：高松市美術館 編集：civi & 牧野裕二（高松市美術館）
デザイン：福井裕子（高松市美術館）

高松市 〒760-0027 香川県高松市紺屋町10-4
美術館 Tel: 087-823-1711 Fax: 087-851-7250

編集後記

■人里離れ秘境の佇まいを残している犬島、神秘さと、おどろおどろしさ、滅びの美がひたひたと心に染み入る哀しくも美しい島でした。それにしてもあの鏡の迷路、あれほど見事に騙されると、格別な快感を得るものですね。 [池田幸子]
■今年も残すところあとわずかとなりました。今年は色々あって思い出深い年でしたが、来年は何があって、どんな作品に出会えるでしょうか？ [石床亜希]
■civiに新メンバーが加わりました。♥ 私たちも気分一新、一緒にがんばりましょう！！ [植松紀子]
■来年の今頃「瀬戸内国際芸術祭」が開催されています。もちろん犬島も開催地のひとつなのですが、他の島々も個性溢れる企画で私達の五官を楽しませてくれることでしょう。ワクワク。 [大澤宏敏]
■美術館に行くとか作家や作品の持つパワーをもらって元気になっているような気がします。やっぱり本物っていいなあ… [木村真由美]

■念願のciviの一員に加わることができ、たくさんのドキドキと感動に大充実の日々です。美術を楽しみ皆さんのお手伝いができればと思っています。 [遠山直子]
■テレビから飛び出したのっぽさんにお会いできました。75歳？驚きました、あんなにスリムで若々しく今もタップダンスを踊ってミュージカルに出演ですとか、素敵に70代！思わず背筋が伸びました。 [石原ミエ子]
■新しくciviの一員になったのをきっかけに、自ら美術館巡りをしたりとアートにふれる機会も増え、スケジュール帳の空欄を埋める事が楽しい毎日です。 [前田裕実]
■11～12月のアニュアル展からcivi新メンバーがギャラリートークを開始。初トークが、高松市美術館史上最も(?)先鋭的・実験的な展示とあって、さぞ大変かと思いますが、最初が大変だと後が楽かも！？ [高松市美術館学芸員 牧野裕二]